

インドの知性を象徴するEPW誌（特集 アジア地域研究と雑誌 -- 「コア・ジャーナル」を語る）

著者	佐藤 宏
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	198
ページ	32-34
発行年	2012-03
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00004040

インドの知性を象徴するE P W誌

佐藤 宏

学生の卒業論文から専門的な研究者の論文まで、社会科学分野でインドについて何か書こうとする人が、まちがいに目を通さずに

はない雑誌といえ、*Economic and Political Weekly* をおいて他にない。略称E P W、日本の研究者なら「エコポリ」と呼ぶこの週刊誌の最大の特徴は、「インドで何が起きているか」と「インドについて（世界中で）何が研究されているか」を同時に確かめることである。学術専門誌では前者は望めないし、週刊情報誌では後者を望めない。「エコポリ」は一冊でこの両者を可能にする稀有な存在である。同じような役割を果たしている週刊誌としては、世界広しといえども、自然科学における『ネイチャー (Nature)』誌以外にはない。これは私が言うのではない。

く、E P W自身がそのウェブサイトで誇らしげに披露している自負である。

E P Wの前身である*Economic Weekly* (E W) 誌が創刊された一九四九年から数えて二〇一二年で六三年間、改題された一九六六年から数えても四六年間、この雑誌はインド研究になくしてはならぬ「コア・ジャーナル」としての役割を十二分に果たしてきた。私自身も、ちょうどこの雑誌がE WからE P Wに切り替わる節目の時期にインドに関心を抱きはじめ、当時大塚にあった東洋文化研究所の図書室で、E Wのファイルをつた記憶がある。長年の読者として常日ごろから感じてきたこの雑誌の特徴を、多少の追想もまじえ、かいつまんで紹介してみたい。

●社会科学研究の知的フォーラム

研究論文についていえば、たしかにE P Wのものは、理論的な探求それ自体を第一義的には目的としない。そのような役割は、あまたある各分野の専門誌が担うであろう。E P W論文の特徴は、インドの社会、その政治経済の抱える課題を科学的に掘り下げるところにある。そしてE Wの時代から、論文がとりあげる問題は、つねに先駆的であった。また重視されるべき課題や分野については、随時特集を組んできた。現在では農業、産業と経営、ジェンダー、科学政策、労働の五つのテーマが一定の間隔を置いて特集される。二〇一一年から特集のテーマに都市研究が加わったことは、近年のインド社会の変化を反映している。

さらに、こうした特集やシリー

ズ記事は、その後しばしば単行本として刊行されてきた。その最も早い事例は、E Wの時代にインドの村落調査の記事を一冊にまとめた*India's Villages* (Calcutta: Development Dept., West Bengal, 1955) である。この表紙のペラペラな論集は、私自身も想い出がある。インドについて勉強したいと学部の講師であったW・H・ニューウェル先生に申し出た時に、貸していただいた本だからである。また初期のE P WではV.M. DandekarとN. Rathによる*Poverty in India* (Poona: Indian School of Political Science, 1971) はその後の貧困研究の先がけとなった。

インドの社会科学研究という側面では、無視できないのはE W/E P Wが学問分野を横断するインドの社会科学研究の推進母体、インフラストラクチャーとなってきた点である。ある研究者によれば、E P Wは「政府の資金がついた凡百の研究プロジェクト以上にインドの社会科学研究の発展に貢献した」のである。単なる論文発表の場を超えた知的フォーラム、それを「E P Wコミュニティ」という人もいるが、E P Wが各種の学会からは独立した一個の社会科学

フォーラムとして存在し続けてきたこと、この点にインドの社会科学の発展に果たした本誌の特別な役割がある。

●本誌を育てた二代の編集長

週刊誌として、これだけの水準を長期にわたって維持できるインドの知的風土の豊かさもさることながら、その歩みは創刊以来の二代にわたる編集長の存在を抜きには語れない。

E Wの創刊者であり、E P Wになつてからも表紙に創刊者兼編集長として名前を記されてきたのが、サチン・チョウドゥリ (Sachin Chaudhury: 1904~66) である。ベンガルのザミンダール(領主的な地主)の出身で、カルカッタ大学で経済学を学んだ後、ボンベイに移り映画のプロデューサーであった実弟の口利きで映画会社の重役を務めるなど、多彩で異色の経歴の持ち主である。一九四九年に発刊された二四ページあまりの週刊誌は、間もなく一九五〇年代を通じて、歴代の連邦政府蔵相の必読誌となった。また、彼の没後一〇年を機に企画された追悼論文集 (Krishnaswamy et al. eds. [1977]) の顔ぶれを見れば明らか

かなように、ジョーン・ロビンソンからM・N・シュリーニヴァースまで、社会科学の諸分野で幅広く内外の最高の研究者をE W誌に引きつけたのは、チョウドゥリ自身の知識人としての魅力であった。また、いかにも土地貴族の末裔にふさわしく、チョウドゥリは周囲からの資金援助の申し出や、E W誌の財政的な健全化のための広告集めや基金の創設などには最後まで首を縦に振らなかった。一九六六年の基金 (Samiksha Trust) の設置とE P Wへの移行は、そうしたチョウドゥリの「個人商店型」経営の行き詰まりの結果でもあった。彼はE P W発刊後間もなく、同年一月に死去した。ついでE P W時代を支えたのは、E Wの最後の数年間にチョウドゥリを支えたケーララ州出身のクリシュナ・ラージ (Krishna Raj, 1937~2004) である。ラージはデリー・スクール・オブ・エコノミクスを卒業後、チョウドゥリに見込まれて一九六〇年にE Wに参加し、編集に携わった。正式には一九六九年に編集長に就任し、二〇〇四年一月の急死までその職責を担った [“Reminiscences” 2004]。私自身はE P Wの事

務所を一九八〇年代に一度訪問しただけであるが、ラージ氏は人々が評するように自ら多くを語る人でなく、その時の記憶としていま私に残っているのは、恥ずかしいことだが、ちやうど脇に居合わせた経済史家の故ダニエル・ソーナー氏の夫人、アリス・ソーナーさんのおしゃべりだけである。アリス・ソーナーはダニエルとともに、サチン・チョウドゥリの親密な協力者であった。クリシュナ・ラージの夫人マイトレイー・ラージの研究パートナーでもあり、E P Wのジェンダー特集を最初に企画したのがアリスさんであった。

チョウドゥリ、ラージの二人の編集者に共通するのが、若手研究者、新たな書き手の発掘にかけた情熱である。結果的にE W/E P Wはインドの社会科学者の育成機能までも果たしてきた。例えば、いまでは知らぬ人のない大学者アマルティア・セン (一九三二~) がはじめてチョウドゥリのE Wに登場したのは、技術選択を論じた一九五六年の第二九号で、二三歳という若さである。センはその後一九六四年の第四七号まで二二点の論文をこの雑誌で発表してお

り、いかにE Wがセンの成果発表の場として重要であったかが察せられよう。

E P Wとラージについては、歴史家のラーマチャンドラ・グハ(一九五八~)の例をあげよう。彼もカルカッタの経営研究所の博士課程に在籍中に、ラージによって「発掘」された。経営研究所にイギリス植民地期の森林政策を調べている若い研究者がいると伝え聞いたラージは、研究所のスタッフである経済学者ニルマル・チャンドラを通じてグハを探し当てた。グハの森林政策史に関する論文が最初にE P Wに掲載されたのは、一九八三年の第四三号である(グハ二五歳)。グハは近著India after Gandhi (London: Picador, 2007)の巻末謝辞で亡きラージを追憶し、そのE P W誌について、「同誌の生命自身が、(インド)共和国の生命と不即不離の関係にあった」という賛辞を書いている。こうして現在活躍中の多くのインド人社会科学者が、E W/E P Wという舞台で育てられてきた。

●電子媒体への移行

E P Wが紙媒体のほか、電子媒体での刊行を開始したのは一九九

九年であったが、無料であったアクセスがしばらくして有料になった（購読者は無料でアクセス可）。ただし、幸いなことに今でも直近の四週間分だけは無料で閲覧が可能になっているので、購読料なしで閲覧は可能である。私自身も購読料を払わずに利用している一人であるが、月一回の頻度できちんきちんとサイトをチェックするのは意外と難しい。気がつくとき読めなくなっている号がどうしても出てきてしまう。必要な記事、論文はその都度コピーをとるなり、ダウンロードするなりしているが、バックナンバーを随時参照することはできない不便さがある。ただ、最近になって、EPWの創刊号からの（研究論文だけでなく）全記事の索引だけは、非購読者にも開放されている。その他有料で利用できるものには、CD-Rによる本誌バックナンバー、同誌の調査部門であるEPW Research Foundation (EPWF) の提供する経済・金融データがある（詳しくはサイン <http://epw.in/epw/user/userindex.jsp> を参照）。

最後になるが、ふだんからの読者はお気づきだろうか、EPW (EW) はごく最近（二〇〇六年）ま

で筆者の所属、肩書きを載せてこなかった。これは、論文は所属（肩書）で評価されるのではないという、ラージの（そしておそらくチヨウドウリに始まる）意識的な方針による。EPWはインドの知性の象徴であり、その刊行が続く限り、インドの知的なエネルギーが枯渇することはないだろう。（やまう ひろし／南アジア研究者）

《参照文献》

- ① Krishnaswamy, K.S., Ashok Mitra, I.G. Patel, K.N. Raj and M.N. Srinivas (eds.) [1977] *Society and Change. Essays in Honour of Sachin Chaudhuri* (Bombay: Oxford University Press)
- ② Reminisceses [2004] *Economic and Political Weekly*, January 31, 2004, pp.387-395.
- ③ Patel, Sujata, Jasodhara Bagchi and Krishna Raj (eds.), *Thinking Social Science in India. Essays in Honour of Alice Thorner* (New Delhi: Sage Publications, 2002)
- ④ Institute for Studies in Industrial Development, *ISID Index Series: Volume Two, Sixteen Economic Journals* (New Delhi: ISID, 1998)